Osaka University Knowledge Archive

Title	を格のスタイル切換え : 東京下町・大阪市・津軽方言の対照
Author(s)	阿部, 貴人
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2005, 7, p. 21-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23243
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大社会言語学研究ノート』第7号（2005年3月）21-38

を格のスタイル切換え
—東京下町・大阪市・津軽方言の対照—

阿部　貴人

【キーワード】を格、ゼロマーク化、動詞との隣接性、語彙名詞、代名詞

【要旨】

本稿では、「を格」の切換えについて、東京下町方言話者・大阪市方言話者・津軽方言話者を対照し、分析・考察を行った。分析の結果、以下のような点を明らかにした。

(A) 名詞句と動詞の隣接性に関して

(a-1) 三地点ともに名詞句と動詞が隣接している場合は、隣接していない場合よりもゼロマーク化が起こりやすいという先行研究と同様の結果が得られる。ただし、東京下町方言話者は非隣接でゼロ形を使用せず、大阪市方言話者、津軽方言話者は隣接で「を」を使用しない、といった違いがある。

(a-2) 三地点ともにカジュアル談話に比べて、フォーマル談話で「を」の割合が高くなるが、隣接の場合に「を」の明示率がゼロマーク化率を上回る東京下町老年層と、「を」の明示率が高まるもののゼロマーク化率を上回ることのない大阪市方言話者、津軽方言話者といったタイプに分れる。

(B) 名詞句の形式差に関して

(b-1) 東京下町方言話者には先行研究と同様に、ゼロマーク率の高さに「語彙名詞＞代名詞」というランキングが認められるが、大阪市方言話者、津軽方言話者では「代名詞＞語彙名詞」というランキングとなる可能性がある。

(b-2) また、津軽老年層はカジュアル談話の「代名詞＞語彙名詞」からフォーマル談話の「語彙名詞＞代名詞」といったランキングへと、ゼロマーク化の体系を切換えている可能性がある。

1.　はじめに

日本語の共通語および方言の話しことばでは、目的語名詞句の格助詞「を」と、「を」の省略（以下、「ゼロ形」もしくは「φ」とする）がバリエーション関係をなすことはよく知られている。

(1) 一緒にご飯{を／φ}食べよう。

(2) A：誕生日に何{を／φ}もらったの？

　　B：花{を／φ}もらったよ。

本稿の目的は、「を」格のゼロマーク化[1)]と方言話者のスタイル切換えの関連について、以下の2点から考察を行うことである。

(a)「を」格のゼロマーク化はスタイル切換えにあずかるのか（つまり、「を」とゼロ形式はスタイルを軸として切換えるバリエーションであるのか）

(b)「を」による明示的な格表示とゼロ形の切換えのあり方は、方言によって共通／相違するのか。

以下では、まず格助詞「を」のゼロマーク化に関する先行研究を概観し、研究課題として残されている視点について述べ（§2.）、本稿の分析データを示す（§3.）。次に、先行研究で示された言語内的要因から2つの仮説を立て、仮説の検証とスタイル切換えの様相について分析する（§4.）。

2. 先行研究と問題のありか

ヲ格のゼロマーク化を主なテーマとした研究は、生成文法や社会言語学の立場から、日本語（共通語・東京方言）を対象とした分析（Tsutsui1984、Saito1983、Masunaga1988、Hosaka et al 1992、Matsuda1995、松田2000）、および日本語学習者を対象とした分析（松田2001、2002）がなされてきた。

まず、ゼロマーク化に関わる要因を言語内的要因と言語外的要因に分けて概観する。

言語内的要因として検討されてきたのは、名詞句と動詞の隣接性（Tsutsui1984、Saito1985）、語彙名詞と代名詞の差（Hosaka et al 1992）、名詞句の情報性（Masunaga1988）などである。松田氏の一連の研究ではそれらの言語内的要因について、東京方言話者の談話資料を用いて数量的な手法による検討を行い、東京方言におけるゼロマーク化要因を検討している。それらの分析（Matsuda1995、松田 2000）から、ゼロマーク化の要因として認められたものをまとめると、以下のようになる（松田2001：61）。

(a) 名詞句と動詞の隣接性

名詞句と動詞が隣接している場合は、隣接していない場合よりもゼロマーク化が起こりやすい。

(b) 名詞句の形式差

疑問詞＞普通名詞＞代名詞＞節　の順でゼロマーク化が起こりやすい。

また、言語外的要因としては、スタイル差によるゼロマーク化の異なりが検討されてきた。Tsutsui（1984）およびMatsuda（1995）・松田（1998）では、以下のような結果が得られている。

(c) スピーチスタイル

くだけたスタイルの場合は、改まったスタイルよりもゼロマーク化が起こりやすい。

さらに、韓国語母語話者を対象とした研究（松田 2001）では、（学習者のレベルによる分析を含めて）上記の内的要因についての分析を行い、以下のことを指摘している。

(d) 母語話者の「普通名詞＞代名詞」と同様のランキングでゼロマーク化が起こりやすい。

松田（2001、2002）では、この「普通名詞＞代名詞」といったランキングが、言語に普遍的な現象であるか否かといった観点から考察を行っている。しかしながら、中国語母語話者を対象とした分析（松田 2002）では、ランキングは「語彙名詞＞代名詞」となるものの、統計的に有意な差は認められず、言語普遍性についての十分な検討には至っていない。

これらの先行研究で残された研究課題を、(A) 分析の対象となる話者、(B) 分析のアプローチといった観点からまとめ、それぞれについて説明する。

(A) 分析の対象となる話者

(A-1) 日本語方言話者を対象とした分析

(A-2) 中間言語話者を対象に「語彙名詞＞代名詞」といったランキングの普遍性についての検討

(B) 分析のアプローチ

(B-1) 様々なスタイル差についての分析

(B-2) 文／発話の連鎖といった観点からの分析

(B-3) 有生性といった観点からの分析

以下、それぞれに説明を加える。

(A-1) は、日本語における地域差の検討である。日本語の地域方言では、ゼロマーク化が頻繁に起こるとされる方言がある。さらに、一部の方言では、「を格」の形態として方言形式が用いられる場合もある。これらの方言と東京方言のゼロマーク化に関わる要因は共通／相違するのかを検討するものである。

(A-2) は、「語彙名詞＞代名詞」といったランキングが普遍的にみられるのか、あるいは明示的な形態が格表示を行う日本語や韓国語と、異なった方法で格表示を行う中国語や英語といった言語による違い（格表示のあり方による違い）であるのかの検討である。

また、(B-1) でいうスタイルとは、発話に対する注意度といったスタイルや、誰に対する発話か（どのような場面か）といったドメインタイプのスタイルなど、いくつかのスタイル差について検討するものである。

(B-2) の発話の連鎖とは、「前文でゼロ化が起きると後続文でもゼロ化が起きやすくなる」のかといった、文レベルを超えて発話レベルで捉えることである（松田 2000 : 73 において課題として挙げられている）。これは、一人の発話における文や発話の連鎖であるが、会話というインターアクションにおいては、話し相手のことばに合わせるといったアコモデーションについても、発話の連鎖として考慮する必要があろう。

(B-3) の有生性による分析も、松田（2000）で課題として挙げられたものである。東京方言では有力な要因として働いてはいないようだが、『方言文法全国地図』第 6、7 図によれば地域言語では有生性がゼロマーク化の要因として立てられる地域もありそうである

（松田 2000：73）。

本稿は、上記の研究課題のうち、（A-1）（B-1）について取り組むものである。つまり、方言話者の「を」格のゼロマーク化とスタイルの関係について、「スタイル切換え」という観点から分析・考察を行うものである。なお、（A-2）（B-2）（B-3）については今後の課題としたい。具体的には（A-2）は本稿の分析資料とする SS コーパスの日本語学習者のデータ（次節参照）を分析すること、（B-2）（B-3）はデータを補充した上で、今後検討することにする。

3. 資料と分析対象

3.1. 資料

本稿では、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室の SS コーパス ver. 1.0 を分析資料とする。このコーパスは日本語方言話者と日本語中間言語話者のスタイル切換えを分析することを目的として、いくつかの方言話者／日本語学習者のカジュアルな談話とフォーマルな談話を録音収集したものである[2)]。本稿では、方言話者のうち、東京下町方言話者・大阪市方言話者・津軽方言話者のデータを分析対象とする。三方言を対象とする理由は以下のとおりである。

東京下町方言：方言間の対照のためのベースラインデータ。

大阪市方言　：「を」のゼロマーク化が頻繁に起こるとされる方言であること（山本 1982）。

津軽方言　　：「を」のゼロマーク化が頻繁に起こるとされ、さらに「を」格の表示にト・トバ・バ・ゴトといった方言形式を備えた方言であること。

表 1、2 に東京下町データの情報（松丸・辻 2002：98 より抜粋）、表 3、4 に大阪市データの情報（細谷 2003：42 より抜粋）、表 5、6 に津軽データの情報（阿部・坂口 2002：12 より抜粋）を示す。

〔表 1　東京下町：インフォーマント情報〕

	年齢	職業	居住歴
SA	70	元寿司職人・乾物屋	0-60：東京都中央区　60-：千葉県柏市
SC	85	元呉服屋・現ビルオーナー	0-：東京都中央区（兵役 5 年があるが地域は不明）
YA	21	寿司職人	0-：東京都中央区
YC	21	学生	0-1：福島県福島市　1-：東京都中央区
YF	28	学生	0-15：京都市左京区　15-23：東京都江戸川区 23-：大阪府池田市

〔表 2　東京下町：談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老－老	SA－SC	親しい同年代	32 分	SC が多く発話
老－若	SA－YA	祖父と孫	30 分	YA が質問、SA が答える
老－調	SA－YF	初対面	28 分	YF が質問、SA が答える
若－若	YA－YC	親しい同年代	38 分	同程度の発話量
若－調	YA－YF	初対面	28 分	YF が質問、YA が答える

〔表 3　大阪市：インフォーマント情報〕

	年齢	職業	居住歴
SA	68	不明	0-68:大阪市(北区、淀川区)
SC	81	元会社員	0-19:大阪市中央区、19-20:東京都、21-26:中国、27-81:大阪市東淀川区
YA	24	学生	0:神戸市垂水区、0-24:大阪市北区
YC	24	フリーター	0-2:兵庫県三田市、2-24:大阪市東淀川区
YF1	27	学生	0-18:青森県、18-22:東京都、22-27:大阪府池田市
YF2	23	学生	0-18:新潟県、18-22:富山県、22-23:大阪府池田市

〔表 4　大阪市：談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老－老	SA－SC	サークル仲間で高校の同窓生	40 分	同量の発話
老－調	SA－YF1	初対面	40 分以上	SA が YF1 に語る
若－若	YA－YC	高校時代からの仲のよい友人	40 分	YA は YC の聞き役、YC の発話量が 6 割～7 割
若－調	YA－YF2	初対面	40 分	互いに質問、発話量は同程度

〔表 5　津軽：インフォーマント情報〕

	年齢	職業	居住歴
SA	69	農業	0-：青森県弘前市
SC	66	農業	0-：青森県弘前市
YA	23	教諭	0-18：青森県弘前市　18-22：東京都　22-：青森県弘前市
YC	23	会社員	0-：青森県弘前市
YF	25	学生	0-18：兵庫県姫路市　18-大阪府池田市

〔表 6　津軽：談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老－老	SA－SC	夫婦	31 分	SC 主導
老－若	SA－YA	祖父と孫	33 分	YA が質問、SA が答える
老－調	SA－YF	初対面	39 分	YF が質問、SA が答える
若－若	YA－YC	同年代	42 分	ほぼ同量の発話
若－調	YA－YF	初対面	46 分	YF が質問、YA が答える

ここで、本稿中で用いる記号等についてまとめておく。上記の話者記号は、はじめのア

ルファベットが年齢層（S＝老年層、Y＝若年層）を表し、2 つ目が話者の属性（A＝分析対象者、C＝カジュアルな場面の話し相手、F＝フォーマルな場面の話し相手（＝調査者））を表す。また、老年層同士の談話を〔老－老〕のように表記する。同様に、老年層と若年層の談話を〔老－若〕、老年層と調査者の談話を〔老－調〕、若年層同士の談話を〔若－若〕、若年層と調査者の談話を〔若－調〕と表記する（表 2・4・6 参照）。なお、場面を表す場合には「東京下町 SA の《対調》」のように《対…》と示し、談話例をあげる場合には〔東京下町：老－老〕のように〔地域名：談話名〕という形式で示すことにする。

なお、大阪市方言では〔老－若〕の談話収録がなされていないため、東京下町・津軽も〔老－若〕の談話は分析の対象から省く。したがって、各地点とも〔老－老〕〔老－調〕〔若－若〕〔若－調〕の 4 場面が分析対象のデータとなる。

3.2. 分析の前提

ここで、分析の対象から省くものとゼロマークの認定方法（カウント方法）についてまとめておく。

(1) 直接引用発話

直接引用発話では、話者以外の発話を引用する場合や、話者自身の異なったスタイルでの発話を引用する場合などがあり、非引用発話と同列に扱うことはできない。したがって、直接引用発話は分析の対象外とする。

〔1〕

→256SA: そーじゃなけりゃー、あのー、こ こ「これφ ください」ってゅーと 店員が そこへ 行かなきゃなんない。 〔東京下町・老－調〕

(2) 修飾語が前接しない「漢語＋する」

修飾語が前接しない「漢語＋する」は「を」であるのか「φ」なのかが解釈不能であり、2 つの形式がバリエーションとして対立しているとは言えない（〔2〕）。したがって、分析からは省く。修飾語が前接する場合（例えば〔3〕のような場合）は分析の対象とする方針であるが、分析データ中の「漢語＋する」はすべて修飾語がなかった。

〔2〕

→836SC:なんか SM≪学校名≫女子 あれ 合併ー、女学校も合併してまんねん 〔大阪:老－調〕

〔3〕

英語の勉強をする 〔作例〕

(3) 慣用的な表現

慣用的な表現（例えば〔4〕のような場合）も分析の対象外とする方針であるが、分析データには現れなかった。また、〔5〕のような、大阪市 SA にみられる「あれする」という表現（《対老》3 例、《対調》1 例）も、「を」とゼロ形がバリエーション

とはならないと考え、分析からは除いた。

〔4〕

お気をつけて　〔作例〕

〔5〕

→666SC:今度 YI≪人名≫さん いっぺんねー、おあいしたいんやけど なかなか 体がようなったら行きたいんやけど 体があんまりあれしてないからねえ　〔大阪:老ー調〕

(4)　述語がない発話

名詞句だけで動詞がない場合は、後述する動詞との隣接性の分析が不可能なため、分析の対象外とする。

〔6〕

→764SA:年輩者の、こ、こーきーて[聞いて]ー、だんだん死語になってるーようなんを

765YF:あー

766SA:ねえ↑

767YF:そうですね、今ー・・・　〔大阪:老ー調〕

なお、〔7〕のように、同じ名詞句が繰り返され、動詞が1つの場合は1回としてカウントした。

〔7〕

→059SA:薪φ (SC:ん) 薪φ 運ごんだなー。　〔津軽:老ー老〕

次節では、三地点におけるカジュアルな場面とフォーマルな場面の結果を示し(§4.1.)、先行研究で示された言語内的要因から2つの仮説を立て、名詞句と動詞の隣接性とスタイル切換えとの関連(§4.2.)、名詞句の形式差とスタイル切換えの関連(§4.3.)について分析・考察する。

4. 分析

4.1. を/φのスタイルによる分布

まず、三地点の結果を表7〜9に示す。

〔表7*1*2　東京下町方言話者の結果〕

	老(SA)		若(YA)	
	対老	対調	対老	対調
を	6 (40)	38 (70.4)	7 (38.9)	5 (27.8)
φ	9 (60)	16 (29.6)	11 (61.1)	13 (72.2)
計	15	54	18	18

*1 本稿では§3.2.のような基準でカウントしたため、松丸・辻(2002)とは数値が異なる。

*2 ( ) 内は%、縦の合計が100%

〔表 8*1　大阪方言話者の結果〕

	老（SA）		若（YA）	
	対老	対調	対老	対調
を	2（5.3）	13（25）	1（5.3）	4（23.5）
φ	36（94.7）	39（75）	18（94.7）	13（76.5）
計	38	52	19	17

*1　（　）内は%、縦の合計が 100%

〔表 9*1*2　津軽方言話者の結果〕

	老（SA）		若（YA）	
	対老	対調	対老	対調
を	-	7（25.9）	-	13（50）
φ	7（87.5）	20（74.1）	44（95.7）	13（50）
トバ*3	1（12.5）	-	2（4.3）	-
計	8	27	46	26

*1 本稿では§3.2.のような基準でカウントしたため、阿部・坂口（2002）とは数値が異なる。
*2　（　）内は%、縦の合計が 100%
*3　SA・YA ともにトバのみを使用しており、ト・バ・ゴトは用いられていない。

表から分かることをまとめると、以下のようになる。

(1)　東京下町 YA の「を」の割合は、《対若》よりも《対調》の方が低い。

(2)　東京下町 YA 以外の話者は、カジュアルな場面（SA の《対老》、YA の《対若》）に比べ、フォーマルな場面（《対調》）での「を」（津軽方言話者）の割合が高い。

この 2 点から、スタイルと明示的な格表示・ゼロ形の関連について、以下のように言える。

(A)　東京下町 YA では明示的な格表示を行うことがスタイルとは連動しないか、もしくはフォーマルな場面とゼロ形が連動する。

(B)　東京下町 SA、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA は、フォーマルな場面ほど明示的に格表示を行う（つまり、「を」とゼロ形は stylistic なバリエーションである）。

(A) は、東京下町 YA における《対若》《対調》の「を」とφの割合にあまり差がない（統計的なテストでも有意差は認められない）ことから、東京下町 YA の「を」とゼロ形はドメインタイプのスタイルとは連動しないと考えることが妥当であろう。この結果は、§2.の「くだけたスタイルの場合は、改まったスタイルよりもゼロマーク化が起こりやすい」（松田 2001）という結果に反するものである。

ここで東京 YA の《対若》《対調》といった場面そのものが、それぞれ「カジュアル」「フォーマル」といった性格を持っていないのではないかという反論が考えられる。しかしながら、表 1 と 2 のように、東京下町 YA の《対若》は親しい同年代との会話であるためフォーマルな場であったとは考えにくく、また、《対調》は初対面の年上との会話であるため、《対若》よりもカジュアルな場面であった可能性は低い（松丸・辻 2002 の丁寧形式と非丁寧形式の切換え、否定形式の切換えなど、多数の項目がその証拠となる）。

次に、(B) の「を」とゼロ形がスタイル切換えにあずかる東京下町 SA、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA の結果を切換え率・切換えのあり方といった観点でみると、以下のようにまとめられる。

(a) どの話者も、場面間でカテゴリカルな切換えを行うのではなく、使用率が変動するといった、いわば連続的な切換えを行う。

(b) ゼロマーク化率が《対老》で高く《対調》で低くなる東京下町 SA というタイプ、《対老》もしくは《対若》に比べ《対調》でのゼロマーク化率が低くなる大阪市 SA・YA と津軽 SA というタイプがあり、津軽 YA はその中間に位置する。

(c) 津軽 SA・YA は、カジュアルな場面では「方言形式：φ」という 2 項対立、《対調》で「を：φ」という 2 項対立となっている。

既に述べたように、先行研究では、くだけたスタイルよりも改まったスタイルでゼロマーク化率が低くなることが述べられている（Tsutsui1984、Matsuda1995 など）。本稿の結果から、東京下町 SA、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA は同様の結果が得られるが、東京下町 YA ではゼロマーク化とスタイルが連動しないという結果が得られた。

4.2. 言語環境による分析

では、先行研究で述べられた他の言語内的要因は、三方言話者のゼロマーク化と、「を」「φ」の切換えに関連するのだろうか。先行研究の結果を援用して、2 つの作業仮説を立て（§4.2.1.）、それぞれについて検証していく（§4.2.2.と §4.2.3.）。

4.2.1. 作業仮説の設定

§2.の名詞句と動詞の隣接性、名詞句の形式差についての結果（松田 2001）を再掲する。

(a) 名詞句と動詞の隣接性

名詞句と動詞が隣接している場合は、隣接していない場合よりもゼロマーク化が起こりやすい。

(b) 名詞句の形式差

疑問詞＞普通名詞＞代名詞＞節　の順でゼロマーク化が起こりやすい。

松田（2001：61）では、(a) について次のように述べている。

「動詞と隣接していない場合は名詞句の格表示を明示的にし、隣接の場合は随意とせよ」という規則は、もちろん日本語（の一方言）特有の規則であり、言語普遍的なものではない。それどころか、同じ日本語方言であっても関西方言では隣接していない場合でもゼロマーク化が頻繁にされており、むしろ明示的にされているケースの方が珍しい。

このことから、本稿のデータについて以下のような作業仮説を立てる。

作業仮説 1：カジュアルな場面で明示的な格表示をすることの少ない大阪市方言話者、および津軽方言話者には、名詞句と動詞の隣接性といった要因は関わっていない。

また、松田論文では（b）の「普通名詞（あるいは語彙名詞）＞代名詞」といったランキングは、言語普遍的なものであるとしている。ここから、作業仮説 2 を立てる。

作業仮説 2：「語彙名詞＞代名詞」といったランキングは東京下町方言話者、大阪市方言話者、津軽方言話者に共通してみられる。

次節以降では、この 2 つの仮説が支持／棄却されるのか、また、この 2 つの要因がスタイル切換えとどのように関連するのかについて分析する。

なお、本稿のデータは 1 談話 30 分～50 分程度であるため、環境ごとの分布では頻度数が極めて小さくなる。したがって、傾向を示すとともに、今後の分析の可能性を提示することになると考えられる。

4.2.2. 名詞句と動詞の隣接性（仮説 1 の検証）

名詞句と動詞の隣接性とは、名詞句と述語となる動詞が接しているか（以下、隣接という）、あるいは両者の間に何らかの要素が入っているか（以下、非隣接という）といった言語内的要因である。〔8〕のように、太下線を付した名詞（句）と、二重下線を付した動詞（句）の間に何らの要素をなく、隣接している場合を「隣接」としてカウントする。また、〔9〕のように、名詞（句）と動詞（句）の間に何らかの形態素がある場合には「非隣接」とする。

〔8〕 隣接の場合

→914SA：ご存知？あのー、軍、<u>軍隊の用品</u>φ <u>売ってたとこ</u> ありまっしゃろ

〔9〕 非隣接の場合

→772SA：ひろこうじんとこ んで あれー 前がー 憲兵隊やったから みんな <u>書類</u>φ <u>がーっ</u> <u>運んでったん</u>ですわ 焼け跡へね↑

名詞と動詞の隣接性についての三地点の結果を表 10～12 に示す[3)]。なお、表内の（ ）

は%を示し、列の合計（東京下町・大阪市は2つのセルの合計、津軽は3つのセルの合計）が100%となる。

〔表10　東京下町方言話者：名詞句と動詞の隣接性〕

	老（SA）				若（YA）			
	《対老》		《対調》		《対若》		《対調》	
	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接
を	4 (30.8)	2 (100)	27 (64.3)	11 (91.7)	6 (35.3)	1 (100)	3 (20)	2 (66.7)
φ	9 (69.2)	-	15 (35.7)	1 (8.3)	11 (64.7)	-	12 (80)	1 (33.3)
計	13	2	42	12	17	1	15	3

〔表11　大阪市方言話者：名詞句と動詞の隣接性〕

	老（SA）				若（YA）			
	《対老》		《対調》		《対若》		《対調》	
	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接
を	-	2 (28.6)	7 (20)	6 (60)	-	1 (100)	2 (14.3)	2 (66.7)
φ	31 (100)	5 (71.4)	35 (80)	4 (40)	18 (100)	-	12 (85.7)	1 (33.3)
計	31	7	42	10	18	1	14	3

〔表12　津軽方言話者：名詞句と動詞の隣接性〕

	老（SA）				若（YA）			
	《対老》		《対調》		《対若》		《対調》	
	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接	隣接	非隣接
を	-	-	4 (18.2)	3 (60)	-	-	10 (43.5)	3 (100)
φ	6 (100)	1 (50)	18 (81.8)	2 (40)	40 (100)	4 (66.7)	13 (56.5)	-
方	-	1 (50)	-	-	-	2 (33.3)	-	-
計	6	2	22	5	40	6	23	3

三地点におけるカジュアルな場面（SAの《対老》、YAの《対若》）の結果から、以下のことが分かる。

(1)　どの話者の場合も、非隣接に比べ隣接でのゼロマーク化率が高い。この結果は切換えを行っていないと考えられる東京下町YAでも同様である。

(2)　東京SA・YAは隣接の場合でも「を」を使用する（表10の太枠で囲んだ部分）。

(3)　一方、大阪市SA・YAは隣接の場合に「を」を使用することがなく、津軽SA・YAは隣接の場合に方言形式を使用することがない（表11、12の太枠で囲んだ部分）。

ここから、カジュアルな場面では、

(a)　先行研究と同様に、名詞句と動詞が隣接している場合は、隣接していない場

合よりもゼロマーク化が起こりやすい。

(b)　東京下町方言話者は、非隣接でゼロマーク化を起こしにくい。

(c)　大阪市方言話者と津軽方言話者は隣接で明示的な格表示を行わない。

といった可能性が指摘できる。つまり、隣接／非隣接という言語内的要因が関連することでは共通するものの、どのセルをカテゴリカルにしているかといった点から見れば、隣接と非隣接のどちらが関連するのかといった点で異なるのである。以上の結果から「カジュアルな場面で明示的な格表示をすることの少ない大阪市方言話者、および津軽方言話者には、名詞句と動詞の隣接性といった要因は関わっていない」という作業仮説 1 は、以上のように、この環境が表面化する余地がないと考えるべきかもしれない。

次に三地点のフォーマル場面から分かることをまとめると以下のようになる。

(4)　どの話者の場合も、非隣接に比べ隣接でのゼロマーク化率が高いことで共通する。この結果は切換えを行っていないと考えられる東京下町 YA でも同様である。

(5)　東京下町 SA は、隣接の場合の「を」が「φ」の割合を上回る（《対老》では逆）。つまり、「を」の明示率がゼロマーク率を上回る。

(6)　大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA では、隣接の場合のゼロマーク化率が高い（つまり、「を」の明示率が低い）ものの、カジュアルな場面で使用されなかった「を」も使用している。

つまり、東京下町 SA、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA は、フォーマルな場面での隣接／非隣接の「を」の割合を高めているのである。

最後に、《対老》《対若》といったカジュアル場面と、《対調》というフォーマル場面での隣接／非隣接といった言語内的要因が、質的に同等であるのかを検討しておく。結論から述べると、大阪市方言話者・津軽方言話者の《対老》と《対調》における「非隣接」では、名詞句と動詞句の間に入る要素が異なる場合が観察される。

〔10〕

→074SA:それをー、あのー　ま、預かってんのが　いたよね？　〔東京下町:老ー調〕

〔11〕

→168SA:んー。(YF:へー)林檎　作ってる　人は　林檎の　木φ、あの　いらないの　切って、炊いだり。

〔津軽:老ー調〕

それは、〔10〕のようにフィラーが挿入されている場合や、〔11〕のようにフィラーとヲ格でマークされる名詞句（この場合は「木」）の説明が挿入されている場合である。このような要素はカジュアル場面でも挿入されうるのであるが、実際にはカジュアル場面の非隣接にはフィラーや名詞句の説明が挿入された例がなく、フォーマル場面のみとなっている（東京下町 SA:2 例、大阪市 SA:1 例、津軽 SA:2 例）。これはフォーマルでありながら unplanned（Ochs1979）な談話において、ことばや内容を検索する、あるいは充分に説明しようとするといったことから起こることであると考えられる。したがって、3 地点の SA の「非隣

接」という言語内的環境は、質的に異なるものを含んでいることになる。今後は、カジュアルとフォーマルといったスタイルによって、言語内的な環境が異なる可能性についても考慮し、分析していく必要性を示唆していると考えられる。

以上、本項の結果をまとめると、以下のようになる。

(a) 名詞句と動詞の隣接性

(a-1) 共通点：三地点ともに名詞句と動詞が隣接している場合は、隣接していない場合よりもゼロマーク化が起こりやすい。

(a-2) 相違点：カジュアルな場面では、東京下町 SA・YA は非隣接でゼロ形を使用せず、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA は隣接で「を」を使用しない、といった違いがある。

(b) スタイル切換えのあり方

(b-1) 共通点：フォーマルな場面では、三地点ともに (a-1) を保持したまま、「を」「φ」の割合を高めている。

(b-2) 相違点：カジュアルな場面・フォーマルな場面に共通して、隣接の場合に「を」の明示率がゼロマーク化率を上回る東京下町 SA と、「を」の明示率が高まるもののゼロマーク化率を上回ることのない大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA といったタイプに分れる。

今後、他の地域の分析を行う際には、(a-1) のような「隣接／非隣接のどちらがゼロマーク化しやすいか」という観点のほかに、(a-2) のような「隣接の場合に「を」を明示させるか否か」といった観点も含めて分析する必要性があるだろう。また、(b-2) のような「を」の明示率がゼロマーク化率を上回ることのないタイプは、大阪市・津軽のように、カジュアルな場面でのゼロマーク化が無標とも言える方言に特有のタイプなのかについても検証が必要である。

4.2.3. 名詞句の形式差による分析（仮説 2 の検証）

本節では、ヲ格でマークされる名詞句の形式差といった観点から分析を行う。松田論文では名詞句を、語彙名詞（普通名詞や固有名詞）、代名詞、疑問詞、名詞節の 4 カテゴリーに分け、語彙名詞と代名詞の間にみられる「語彙名詞＞代名詞」というランキングが言語普遍的なものであると結論付けている。このようなランキングが三地点に共通して見られるのか（仮説 2）を検証し、さらにスタイル切換えとの関連を分析する。

ただし、本稿のデータでは疑問詞と名詞節の出現数が少ないため、語彙名詞と代名詞のみを分析対象とする。

表 13～15 に語彙名詞と代名詞に分類した三地点の結果を示す。表内の(　)は%を示し、列の合計（東京下町・大阪市は 2 つのセルの合計、津軽は 3 つのセルの合計）が 100%となる。

〔表 13　東京下町方言話者：名詞句の形式差〕

	老（SA）				若（YA）			
	《対老》		《対調》		《対若》		《対調》	
	語彙	代名詞	語彙	代名詞	語彙	代名詞	語彙	代名詞
を	4 (33.3)	2 (100)	25 (65.8)	10 (76.9)	3 (27.3)	2 (66.7)	4 (25)	1 (100)
φ	8 (66.7)	-	13 (34.2)	3 (23.1)	8 (72.7)	1 (33.3)	12 (75)	-
計	12	2	38	13	11	3	16	1

〔表 14　大阪市方言話者：名詞句の形式差〕

	老（SA）				若（YA）			
	《対老》		《対調》		《対若》		《対調》	
	語彙	代名詞	語彙	代名詞	語彙	代名詞	語彙	代名詞
を	2 (9.5)	-	4 (16.7)	4 (40)	3 (12.5)	-	3 (27.3)	1 (33.3)
φ	21 (90.5)	9 (100)	20 (83.3)	6 (60)	21 (87.5)	1 (100)	8 (72.7)	2 (66.7)
計	23	9	24	10	24	1	11	3

〔表 15　津軽方言話者：名詞句の形式差〕

	老（SA）				若（YA）			
	《対老》		《対調》		《対若》		《対調》	
	語彙	代名詞	語彙	代名詞	語彙	代名詞	語彙	代名詞
を	-	-	2 (11.1)	3 (75)	-	-	10 (45.5)	-
方	1 (33.3)	-	-	-	-	-	-	-
φ	2 (66.7)	1 (100)	16 (88.9)	1 (25)	32 (100)	2 (100)	12 (54.5)	-
計	3	1	18	4	32	2	22	-

まず、カジュアルな場面（SA の《対老》、YA の《対若》）に注目すると、以下のことが分かる。

(1)　東京下町 SA・YA は、代名詞でも「を」を使用する。（表 13 の太枠で囲んだ部分）

(2)　一方、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA では全く使用していない。（表 14、15 の太枠で囲んだ部分）

ゼロマーク化率については、

(a)　東京下町 SA・YA は代名詞よりも語彙名詞のゼロマーク化率が高い。

(b)　大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA では、むしろ代名詞のゼロマーク化率が高いとも言える。

ということになる。(b) は先行研究でみられる「語彙名詞＞代名詞」の順でゼロマーク化しやすいという結果に反することになる。トークンの乏しさがネックとなるため、「語彙名詞＞代名詞といったランキングは東京下町方言話者、大阪市方言話者、津軽方言話者に共

通してみられる」という仮説2を棄却するのは危険である。しかしながら、方言では異なったランキングがあることをうかがわせる結果であり、データを増やして検証する必要がある。

次に《対調》（フォーマル場面）の結果から、以下のことが分かる。

(1) 東京下町SAは、語彙名詞での「を」の明示率が「φ」の割合を上回り、代名詞との差が小さくなる。

(2) 大阪市SA・YAは、語彙名詞と代名詞のゼロマーク化率がほぼ同率となる（若干ではあるが語彙名詞のゼロマーク化率が高い）。

(3) 代名詞の使用がない津軽YAを除き、大阪市SA・YA、津軽SAの代名詞では、カジュアルな場面で使用しなかった「を」が使用される。しかし、ゼロマーク化率を上回ることはない。

(4) 津軽SAでは、語彙名詞のゼロマーク化率が代名詞のそれを上回るとも言える。

(1)（2）の結果から、東京SAと大阪市SA・YAのフォーマル場面では（「を」の明示率が「φ」を上回るか否かといった違いはあるものの）「語彙名詞≧代名詞」のように、語彙名詞と代名詞の差が小さくなるといった点で共通する。

また、(1)（3）の結果から、名詞句と動詞の隣接性の結果（§4.2.）と同様に、カジュアルな場面とフォーマルな場面で「を」の明示率が逆転する東京SAと、逆転することのない大阪SA・YA、津軽SA・YAといったタイプに分れることになる。

なお、ここでもトークンの乏しさがネックとなるが、(4)の結果から、津軽SAは「代名詞＞語彙名詞」といったランキングから「語彙名詞＞代名詞」といったランキングへと、ゼロマーク化の体系を切換えている可能性がある。

以上、本項の結果をまとめると、以下のようになる。

(a) 語彙名詞と代名詞によるゼロマーク化

東京下町SA・YAには先行研究と同様に「語彙名詞＞代名詞」というランキングが認められるが、大阪市SA・YA、津軽SA・YAでは「代名詞＞語彙名詞」というランキングとなる可能性がある。

(b) スタイル切換えのあり方

(b-1) 共通点：東京下町SAと大阪市SA・YAはフォーマル場面で語彙名詞と代名詞の差が小さくなるという点で共通する。

(b-2) 相違点1：ただし、東京下町SAと大阪市SA・YAではカジュアルな場面とフォーマルな場面で「を」の明示率が逆転するか否かといった点で異なる。

相違点2：津軽SAは「代名詞＞語彙名詞」から「語彙名詞＞代名詞」といったランキングへと、ゼロマーク化の体系を切換えている可能性がある。

5. まとめと課題

本稿では「を」とゼロ形の切換えについて、名詞句と動詞の隣接性、名詞句の形式差といった点から分析を行った。ここで得られた結果をまとめると、名詞句と動詞の隣接性については（a）～（d）、名詞句の形式差については（e）～（h）のようにまとめられる。

《名詞句と動詞の隣接性》（§4.2.）

(a) 三地点ともに名詞句と動詞が隣接している場合は、隣接していない場合よりもゼロマーク化が起こりやすいという先行研究と同様の結果が得られる。

(b) ただし、東京下町 SA・YA は非隣接でゼロ形を使用せず、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA は隣接で「を」を使用しない、といった違いがある。

(c) スタイル切換えのあり方に注目すると、三地点ともに（a）の状況を保持したまま、「を」「φ」の割合を高める。

(d) しかし、隣接の場合に「を」の明示率がゼロマーク化率を上回る東京下町 SA と、「を」の明示率が高まるもののゼロマーク化率を上回ることのない大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA といったタイプに分れる。

《名詞句の形式差》（§4.3.）

(e) 東京下町 SA・YA には先行研究と同様に「語彙名詞＞代名詞」というランキングが認められるが、大阪市 SA・YA、津軽 SA・YA では「代名詞＞語彙名詞」というランキングとなる可能性がある。

(f) スタイル切換えでは、東京下町 SA と大阪市 SA・YA はフォーマル場面で語彙名詞と代名詞の差が小さくなるという点で共通する。

(g) しかしながら、東京下町 SA と大阪市 SA・YA ではカジュアルな場面とフォーマルな場面で「を」の明示率が逆転するか否かといった点で異なる。

(h) さらに、津軽 SA は「代名詞＞語彙名詞」から「語彙名詞＞代名詞」といったランキングへと、ゼロマーク化の体系を切換えている可能性がある。

最後に、残された課題についてまとめておく。§2.で挙げた中間言語話者を対象に「語彙名詞＞代名詞」といったランキングの普遍性についての検討することに加え、他の日本語方言についての分析を行うことで、本稿の結果が大阪市や津軽という地域特有の結果であるのか、あるいは方言に共通するものなのかを検討することが必要である。また、本稿の分析ではトークンの乏しさが分析のネックとなる場合が多かった。データを補充し、本稿の結果の妥当性を検証することも合わせて課題としたい。

【注】

1) 話しことばで「を」が使用されないことについては、postposition drop (Hosaka et al. 1992)、case deletion (Masunaga1988)、particle ellipses (Tsutsui1984) のように、「省略」といった観点で捉えられることが多いが、本稿では、形態による明示的な格表示とゼロ形がバリエーション関係にあるという観点をとる。つまり、助詞が省略されるのではなく、ゼロ形式でマークするという観点をとるものである。したがって、「を」が使われない場合を「ゼロマーク」と呼ぶことにする。
2) 詳しくは本誌第4号「プロジェクトの概要」を参照されたい。
3) 一連の松田論文では、目的語名詞句と動詞の間に入る要素のうち、オノマトペと数量詞は隣接性を阻害しない「透明」な要素で、その他の要素とは異なったふるまいをみせることが指摘されている。松田論文ではこの結果をうけて、間にどのような要素が入っていても「非隣接」とみる「隣接性Ⅰ」と、オノマトペと数量詞を例外扱いした「隣接性Ⅱ」に分けて集計している。しかし、本稿のデータでは、間に数量詞が入る例は見られず、オノマトペが入るものも2例のみであったため、「隣接性Ⅰ」の集計法のみを採用した。

【参考文献】

阿部貴人・坂口直樹 (2002)「津軽方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号

国立国語研究所編 (1989)『方言文法全国地図』

細谷書子 (2003)「大阪市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第6号

松田謙次郎 (1998)「東京語「を」格ゼロマーク化の社会言語学的解釈」Shoin Literary Review No.31

――――― (2000)「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』第51巻1号

――――― (2001)「中間言語と言語変異：KYコーパスを使った「を」格ゼロマーク化の分析」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin.* No.4.

――――― (2002)「「を」格ゼロマーク化と中間言語：中国語母語話者の場合」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin.* No.5.

松丸真大・辻加代子 (2002)「東京下町方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号

皆島博 (1993)「日本語格助詞「を」の省略について ――有生性と定性の関与の可能性――」『言語学論叢 (松本克己教授退官記念論文集)』特別号 58-71

Hosaka, Junko, Takezawa Toshiyuki, and Uratani Noriyoshi. 1992. Analyzing Postposition Drops in Spoken Japanese. *The Proceedings of the International Conference on Spoken Language Processing 1992.*

Masunaga, Kiyoko. 1988. Case Deletion and Discourse Context. In *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, edited by W. J. Poser. Stanford: CSLI.

Matsuda, Kenjiro. 1995. *Variable zero-marking of (o) in Tokyo Japanese.* Doctoral Dissertation,

University of Pennsylvania.

Ochs, E. 1979. Planned and unplanned discourse. T, Givon (ed.) Syntax and Semantics. 12 Discourse and Syntax.

Saito, Mamoru. 1983. Case and Government in Japanese. In *West Coast Conference of Formal Linguistics 2*, edited by M. Barlow et al. Stanford Linguistics Association.

Tsutsui, Michio. 1984. Particle Ellipses in Japanese. Doctoral Dissertation, Department in Linguistics, University of Illinois at Urbana-Champaign.

山本俊治（1982）「大阪府の方言」『講座方言学 7　－近畿地方の方言－』国書刊行会

あべ　たかひと（大阪大学大学院生）

abet@wombat.zaq.ne.jp